特集　煌めく十和田人
相坂若駒会の皆さん



藤坂の誇りを胸に
伝統を受け継ぎ、子どもを育む



大池神社例大祭
少年駒踊りが奉納踊りを披露

市の無形文化財に指定（昭和46年）されている南部駒踊り保存会「相坂若駒会」を特集します。

相坂若駒会 代表 苫米地亮さん、事務局 石田朋也さんに地域の伝統と藤坂地区のお話を伺いました。

地域の煌めきを未来へ
声に宿る、駆ける歴史と伝統

「ハー、スッチョイド」

太鼓や笛の音に重なる、独特の掛け声。続いて聞こえるのは、「サーサノ、サーサ」「ヨイコラ、コラコラ」、不思議で力強い声です。掛け声の意味を尋ねても、はっきりとは分かりませんが、太鼓や笛の音、踊り手の動きと一体になったこの声は、南部駒踊りに欠かすことができないものです。その伝統を受け継いでいるのが、藤坂地区相坂上にある相坂若駒会です。

藤坂地区には、相坂若駒会のほか、六日町鶏舞保存会、藤島獅子舞保存会があり、地域に伝わる芸能を守り続けています。相坂上に伝わる南部駒踊りは、江戸中期に始まったとされ、地域の人々によって受け継がれてきました。南部駒踊りは、旧南部藩領に伝わる民俗芸能で、馬と深く関わってきたこの地域を象徴する伝統芸能の一つです。相坂上の駒踊りは、戦場での活躍を表現しています。馬の頭や胴体を模した木枠を腰につけ、笠で踊り手の視線や顔の表情を隠し、太鼓や笛、手平鉦の囃子に合わせ、勇壮で幻想的に舞う姿からは、長い歴史と伝統が感じられます。

毎年９月に大池神社や白上稲荷神社で奉納踊りのほか、十和田市伝統芸能まつりや高齢者介護施設への慰問、祝宴などの晴れの場で踊りを披露してきました。

相坂若駒会の次の世代を担うのは、相坂上に住む藤坂小学校の３～６年生です。少年駒踊りとして、地域にある三つの子ども会（一本木、白上、小林）が協力し大人と一緒に活動しています。





藤坂に息づく「オラほの学校」が育む心

藤坂地区の中心としてあるのが、地域にとっての「オラほの学校」、藤坂小学校です。

藤坂村時代に初代校長を務めた加藤源三先生は、学校教育だけではなく、農村振興にも力を尽くしました。子どもたちの成長にとどまらず、保護者や村民にも学びの大切さを伝え、地域文化と人づくりの礎を築いた人物です。加藤先生の教えは、今も「加藤訓」として受け継がれています。

加藤訓

志は高きこと八甲田山の如く
心は清きこと奥入瀬川の如く
気宇廣きこと三本木平の如く

この言葉は、藤坂小学校の人づくりの基盤となり、卒業生に色紙として贈られています。

高い志、清らかな心、広い気持ち。加藤先生が大切にした教えは、学校の中だけでなく、地域や人々の中に今も息づいています。

藤坂地区では、子どもが地域の中で大切な役割を担っており、大池神社で行われる学校行事「藤小祭」には、子どもの頑張る姿を見ようと、地域の大人が集まります。町内会対抗の「藤坂地区大運動会」では、子どもからお年寄りまで、同じ競技で熱を込めて競い合います。

また、「大池神社例大祭」では、山車と行列が地域を練り歩くほか、喧嘩太鼓や奉納踊りで大いに盛り上がり、最後には参加者みんなで「さんさ踊り」を踊り、世代を越えて一つになります。そこには、祭りを本気で楽しむ大人がいて、家族で参加する姿があります。練習の成果を披露し、観客の反応に一喜一憂する子どもや大人の姿があります。子どもに毎年、同じ昔の話を語り聞かせるお年寄りがいます。

地域の歴史を知る人、祭りを支える人、応援する人、そしてその中で輝く子どもたち。さまざまな世代の関わりが、藤坂の地域文化を形づくっています。

子どもと共に歴史をつくる

藤坂の歴史は、この地で生活してきた人々の決断と行動によってつくられてきました。地域の行事を守ること。子どもたちに伝統を教えること。昔の出来事を語り継ぐこと。こうした一つ一つの積み重ねが、次の時代の藤坂をつくっていきます。

子どもたちの未来を、今すぐ決めることはできません。しかし、子どもたちと一緒に歴史をつくることはできます。かつて子どもの頃に叱ってくれた大人と、成長した自分が、いつか一緒に駒踊りを踊る。そのとき、子どもたちが地域のつながりや伝統の尊さを感じてくれたら――。そんな願いを胸に相坂若駒会は今日も踊ります。

太鼓と笛、そして意味は分からなくても心に響く、あの掛け声に合わせて。

「ハー、スッチョイド」

長い歴史を背負いながら、藤坂の煌めきは、子どもたちの手から次の世代へ受け継がれていきます。



